【特別講義要旨（3）'93.10.5】

世界から見た日本経済

三　宅　武　雄
（中央大学名誉教授）

活字から経済をとらえようとしたのが，次第に足で経済をみるようになった。それから(1)社会，(2)政治，(3)宗教，(4)軍事，(5)技術などの側面を重視するようになった。また(1)地域別，(2)産業別，(3)規模別の分析が必要であることを痛感するようになった。

そこで世界や国内を歩くようになった。世界を歩くといっても限界がある。ことにアフリカ南部，カリブ海などの諸国や共産主義国には余り訪れていない。また，共産主義国では，調査が難しかった国が多かった。また何時，何処を見たかが問題になる。それは，日本についてもいえることである。国（あるいは地方）によって，時代によって異なることを知るべきである。

世界を見て日本経済の特異性として戦後から石油危機までの高成長をあげることにしよう。この期間に高成長をみせた国としては日本と西ドイツをあげることができよう。その要因として次のものをあげよう。

(1)　外部的要因　　それにはアメリカの協力をあげることができる。経済民主化のほか，貿易，資金，技術などにみられる当時のアメリカには，それだけの力があった。このようなアメリカの協力の中には日本のためばかりでなく，アメリカのためのものもあった。また朝鮮動乱はドッジ・ラインによって低迷していたことも無視できない。

(2)　内部的要因　　これには日本にシュムペーターのいう経営者がいたことをあげることができる。また経営者をバックアップする従業者もいた。さらに社会も安定していた。それは企業経営の中にもみられる。たしかに民主的な企業経営は，諸外国には余りみられない。ことに社内教育は日本以外に，みられなかった。また愛社心は，日本独特のものである。それは昔からのお家大事によるものであろう。

いずれにせよ，日本経済は追い風から向かい風になってきた。また経済小国から経済大国へと変わってきた。これらの面から日本経済を見直すことが必要であろう。